

# 家畜を“盗んで”ノルマを達成する 社会主義期（後期）モンゴルにおける 操作可能な資源としての家畜

—モンゴル国ウブルハンガイ県ハラホリン郡の事例から—

バトオチル バルジンニヤム

総合研究大学院大学 文化科学研究科 地域文化学専攻

## 要 旨

本稿は、モンゴル国ウブルハンガイ県ハラホリン郡で行った聞き取り調査をもとに社会主義期モンゴルにおいてノルマを達成するため、牧民同士で相互的に行われていた「家畜泥棒」を互奪性という概念を用いてその実態を明らかにすることを目的とする。

「家畜泥棒」とは、文字通り、他者の家畜を盗み、それを自分のものとして所有をすることである。しかし、遊牧民同士での相互的に取り合うという不思議な現象が存在する。モンゴル高原では社会的な役割を持つ「家畜泥棒」が記録されているのは、筆者の知る限り、清朝支配の末期の頃である。この時期、富裕な王侯貴族と漢族の商人に借金を負う遊牧民との間に貧富の格差が広がってきた。そんな中、貴族や金持ちの家畜を盗み、もっと貧しい人々に分配する「シリーン・サイン・エル（平原の良き男）」という義賊たちが生まれたのである。

モンゴルにおいて特徴的なのは、比較的平等社会であった社会主義期においても「義賊」が存在したという点である。本稿では、牧畜共同組合の成員たちが家畜の生産頭数のノルマを達成できなかったとき、「サイン・エル（良き男）」と呼ばれる義賊に家畜を盗んできてもらうよう依頼していたことを報告すると同時にその「意義」について考察するものとする。当時のモンゴル人民共和国の計画経済政策により牧畜協同組合（ネゲデル）や国营農場（サンギーン・アジ・アホイ）に設定された計画「ノルマ」を達成するため、地方の人々は必死に働くことになった。しかし、その一方で家畜は「生きた財産/生産手段」であるので、季節によってはガン（干害）やゾド（寒害）が起ると家畜が大量死する。そんなときネゲデルの家畜を放牧する牧民たちは、何とかしてノルマを達成させるために「家畜泥棒」に他の地域から盗むことを依頼するわけである。こうした社会主義時代の家畜泥棒は、「サイン・エル（良い男）」と呼ばれた。

つまり、モンゴル人民共和国では「盗まれた家畜（馬）が操作可能な資源としてインフォーマルな社会関係の源泉のひとつとなっていた」ということである。そして、こうした家畜を盗む人が、人々からサイン・エル、すなわち「良い男」として肯定的に評価されてきたことから判断するに、非公式な形ではあるが、モンゴルの地方の牧民が「家畜泥棒」互奪性によって、ノルマ達成の重圧から救われてきたということである。

キーワード：モンゴル人民共和国、社会主義、家畜交換、家畜泥棒・互奪性、牧畜社会、サイン・エル

# Livestock Theft and Exchange to Achieve Quotas in the Mongolian People's Republic Livestock as Manipulable Resources in the Later Years of the Socialist State:

A Case Study in Kharkhorin Soum, Övörkhangaï Province  
(Anthropology Fieldwork)

Bat-Ochir BALJINNYAM

Department of Regional Studies,  
School of Cultural and Social Studies,  
The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI

## Summary

This article discusses about livestock theft from a viewpoint of the exchange concept in social and cultural anthropology. Research work was conducted based on materials obtained from fieldwork in Kharkhorin Soum, Övörkhangaï Province in central Mongolia. One of the purposes of this research is to explore whether livestock theft in the name of the exchange concept existed in Mongolian nomadic pastoral culture for an extended period as a cultural practice or it has taken place as a social phenomenon. Livestock theft is now considered to be a social issue that is usually dealt with through law enforcement. However, in this study, I would like to describe it as a normal social occurrence based on traditional nomadic culture.

Now a problem for herders, livestock theft was previously an exchange phenomenon in nature. It has been proved by the facts and fieldwork analysis of the livestock theft process and the theory of exchange.

Caroline Humphrey and David Sneath mentioned that “The surplus that is not recovered for reproduction in the mandatory delivery plan (quota) was called “manipulable resources”. By the time there is no “market” in socialist society, such a system of exchanging surplus goods was expressed as the number of inventories, not money. The surplus was a good that could be used as a tool for political negotiations. Humphrey argues that these “manipulable resources” were the source of informal social relations under the socialist regime”. It is undeniable that such transactions may have existed in the pastoral cooperative (Negdel), which corresponds to the Kolkhoz in Mongolia, and the state-owned farm (Sangiin Aj Akhui), which corresponds to the Sovkhoz. On the other hand, what kind of measures were taken when the pastoralists who made up the general Negdel who were not executives could not achieve the quota? Perhaps it was the existence of a thief called “Sain er” who responded to that.

From the information obtained in this study, it can be said that in the Mongolian People's Republic, livestock theft and exchange (of horses) were sources of informal social relations built through manipulable resources. Judging from the fact that those who stole livestock in the context, from a community at the request of another community, were positively evaluated by local people as “Sain er,” that is, a “good man,” in the Mongolian rural pastoral communities, it can be said that theft with “reciprocity” shows that the local people were saved, informally though, from the pressure of achieving quotas.

Livestock theft involves many kinds of social and cultural contexts, and therefore, it was allowed as a necessary factor in nomadic pastoralism in the daily process of nomadic people, but under modern laws, it is recognized as “theft” by people today.

**Key words:** Mongolian People's Republic, exchange concept, anthropology, manipulable resources, “*Sain er*” (man who steals from enormously wealthy people to give to pauper herders), livestock theft/reciprocity, socialist state

はじめに

1. 調査地の概要

2. 社会主義期の生産組織

3. 清朝時代の義賊「シリーン・サイン・エル」

4. 社会主義時代の家畜泥棒「サイン・エル」

おわりに

## はじめに

本稿は、社会主義期モンゴルにおいて牧畜協同組合の生産達成のノルマを達成するため、牧民<sup>1)</sup> 同士で行われていた「家畜泥棒」を互奪性という概念を用いてその実態を明らかにすることを目的とする。

モンゴル国は、人口約335万人（2020年）に対して家畜の頭数が約6700万頭（2020年）という牧畜の国である。本稿の調査地は、モンゴル国のウブスハンガイ県のハラホリン郡である。ここでは同地での聞き取り調査をもとに文献資料も合わせて考察を行っていきたい。

家畜は農耕にとっての土地と同様、牧畜にとっての生産手段である。しかし農耕の土地と異なり、家畜は同時に肉や毛皮といった生産物でもある。家畜が生産手段であり生産物であるという二重性を持つがゆえにその頭数が、遊牧民<sup>2)</sup> にとってわかりやすい貧富の指標だとされる（小貴 1985: 121）。すなわち遊牧民たちの間では、個々人の所有する家畜を増やせば増やすほど、他者より豊かであると考えられているのである。したがってこの家畜という「生きた財産/生産手段」を増やしていくことが、彼らの目標となる。

その一方で、この財産/生産手段は、生きているからこそ様々な問題が発生する。例えば、放牧中に野生の狼に襲われることもある。日帰りの放牧で他の世帯の家畜群と混ざっていなくなることも少なくない。さらに季節によってはガン<sup>3)</sup>（干害）やゾド<sup>4)</sup>（寒害）が起これると膨大な数の家畜が死んでしまうことがある。こうした遊牧という生業について山崎は、わずかの気候変化に大きな影響を受けるほど微妙な脆い基礎の上にある（山崎 1997: 61）と指摘する。

このような自然条件による家畜の増減以外にも、人間の関係性の中で家畜が増減する場合がある。それが遊牧社会における「家畜泥棒」である。「家畜泥棒」とは、文字通り、他者の家畜を盗み、それを自分のものとして所有をすることである。しかしモンゴルの遊牧社会では、遊牧民同士でお互いに知った上で家畜を“盗み合う”不思議な現象が存在する（バルジンニヤム 2018: 2-13）。つまり、遊牧民A氏の私有家畜から知り合いのX氏が家畜を盗んだ場合は「アワハ（*avakh*、取る）」と呼び、泥棒とは認識しないのである。また、家畜を取られたA氏は必要とときX氏の私有家畜から取れば良いという認識もっている。こうした家畜の相互奪取は、遊牧という生業の開始と並行して行われてきたと考えられる。ただし社会的な役割を持つ「泥棒」が記録されているのは、筆者の知る限り、清朝支配の末期の頃である。この時期、富裕な王侯貴族と漢族の商人に借金を負う牧民との間に貧富の格差が広がってきた。そんな中、貴族や金持ちから家畜を盗み、もっと貧しい人々に分配する「シリーン・サイン・エル（平原の良き男）」という義賊たちが生まれたのである（Oidov 2013: 1-15）。

イギリスの歴史学者エリック・ホブズボウムは、アウトローとしての匪賊（bandit）の一種として、氏族社会と近代資本主義社会との中間の段階においてこうした義賊（social bandit）が発生するのだと論じている。この義賊は、領主と国家によって犯罪者とみなされるが、農村社会においては人々に英雄や解放の指導者として尊敬される存在である。

またホブズボウムによると、そもそも部族・

血族社会では襲撃はありふれたことなのであるが、社会内部の階層分化が欠如しているので、社会的プロテストや匪賊を生み出すにいたらないのだという。しかし狩猟民や牧畜民のように反目や襲撃が珍しくない共同体では、自らの階級分化の制度を展開するに至ったとき、あるいは階級的対立に基づく大規模な経済に吸収されたときには、不釣り合いなほどに多数の義賊を生み出すと論じている。さらに、彼は匪賊が工業化以前の社会では当然に、気前のよさと慈善が力と金のある「良き」人間の道徳的責務を持っていた。言い換えれば、富者から奪って貧者に分け与えることは確立され、よく行なわれている慣習であり、少なくとも理想とされる道徳的責務となっていたと述べている（ホブズボウム 2011（1969）：31-38）。

義賊は、ホブズボウムによると、歴史上、世界中に普遍的に認められる社会現象である。それらは文化が伝播したため生じたものではなく、牧畜社会を含め農民社会にも類似した現象が起こっているからだ。しかし資本主義的な近代農業制度以降は、農民社会は義賊を生み出すことをやめてしまう（ホブズボウム 2011（1969）：1-20）。

こうした義賊は世界中のいたるところで存在したようだ。例えば、原によると、20世紀はじめ中部タイ農村では、強盗は「貧困の共有」なのだという。つまり富の再分配に寄与するものとして正統的なものとされた。強盗は裕福な人を襲い水牛その他の財を強奪した。襲撃の前に、神々に自分たちの行為は貪欲からではなく、救うようなのない貧困からの止むなき行為だと釈明する。襲撃する家の前で氣勢をあげると、多くの場合は、目指す家の人々は逃げてしまう。強盗は人間を傷つけることなく目的を達する。さらに自分の村でなく、必ず他村を襲う。したがって自分の属する農村社会では嫌われることなく、むしろ他村の襲撃から社会を護る頼りになる存在とすらいわれていたのである（原 1999:

132-133）。

現代のモンゴルにおいては、家畜を所有する遊牧民同士でゲームのような相互奪取が行われているが、本稿で紹介するのは、社会主義時代の「義賊」としての家畜泥棒である。社会主義時代の義賊は、「シリーン・サイン・エル（平原の良き男）」から「平原の」を意味する「シリーン」という単語を除いて「サイン・エル（良き男）」と呼ばれた。貧富の格差があまりなく、比較的安定した社会であった社会主義時代になぜ義賊が必要とされたのか。本稿では、社会主義時代の達成目標のノルマとの関係からサイン・エルの果たした役割を考察していきたい。

ところで家畜泥棒は、財産の奪取であるが、人類学的に言えば「交換」の一種であるとも考えられる。マーシャル・サーリンズは、惜しみなく一方的に与える「純粋な贈与」や「一般化された互酬性」の対極に相手から利益を得ようとする「否定的な互酬性」という概念を提示した（サーリンズ 1984（1972）：223-256）。

家畜泥棒もある意味、「否定的な互酬性」だと言える。しかし本稿の事例のようなお互いに同意のもとで奪取し合うのであれば、「否定的」とは言えないだろう。そこで本稿では、贈与交換の一種としてお互いに奪い合う「互奪性」という概念を提起したい。

また家畜泥棒は、インフォーマルな交換だとも考えられる。社会主義時代の農村社会（コルホーズ）におけるインフォーマルな交換に関しては、イギリスの社会人類学者、キャロライン・ハンフリーが南シベリアのブリヤート共和国における「カール・マルクス農場」というコルホーズを事例に詳細に論じている。

ハンフリーは、義務的納入計画（ノルマ）にあって再生産に回収されない余剰を「操作可能な資源（manipulable resources）」と呼んだ。社会主義社会では「市場」が存在しないがゆえに、こうした余剰の品々の交換システムは、貨幣ではなく、商品の数量として表現されていた。この

余剰品は、政治的な交渉の道具として利用可能な財であったのだという。このような「操作可能な資源」こそが、社会主義体制下において、インフォーマルな社会関係を生み出す源泉となったのだとハンフリーは論じている（高倉2008: 568; Humphrey 1983）。

ハンフリーが論じた操作可能な資源を操作するのは、コルホーズの幹部たちであったと思われる。モンゴルのコルホーズに相当する牧畜協同組合（ネグデル）やソフホーズに相当する国营農場（サンギーン・アジ・アホイ）においても、このような取引が存在したことの可能性は否めない。その一方で、幹部ではない一般のネグデルを構成する牧民たちがノルマ達成を出来ない時、いかなる対処をしていたのか。それにこたえるのがサイン・エルと呼ばれた義賊の存在だったのではないだろうか。そこで本稿では、モンゴル国ウブハンガイ県ハラホリン郡でおこなった聞き取り調査で得られた情報から、牧民同士での相互的に取り合う家畜の交換として

の家畜泥棒の実態を「互奪性」をキーワードにしながら明らかにしていきたい。

なお筆者が聞き取った「社会主義期」の家畜泥棒とは、主に1970～1980年代、つまりモンゴルの社会主義時代（1924-1992）の後期の事例であることを断っておきたい。

まず第1節では、調査地の概要を説明する。次に第2節において社会主義期における生産組織の歴史を簡単に振り返る。そして第3節では、モンゴル高原で生まれた義賊「シリーン・サイン・エル」の概要を簡潔に説明する。また第4節では、フィールド・データを基に社会主義時代の義賊「サイン・エル」の実態に迫る。最後に結論を述べるものとする。

### 1. 調査地の概要

本稿の対象であるウブハンガイ県のハラホリン郡は、モンゴル帝国の第2代オゴデイ・ハーンが建設した都城カラコルムがあった場所である。カラコルム（現代モンゴル語ではハラホリン）

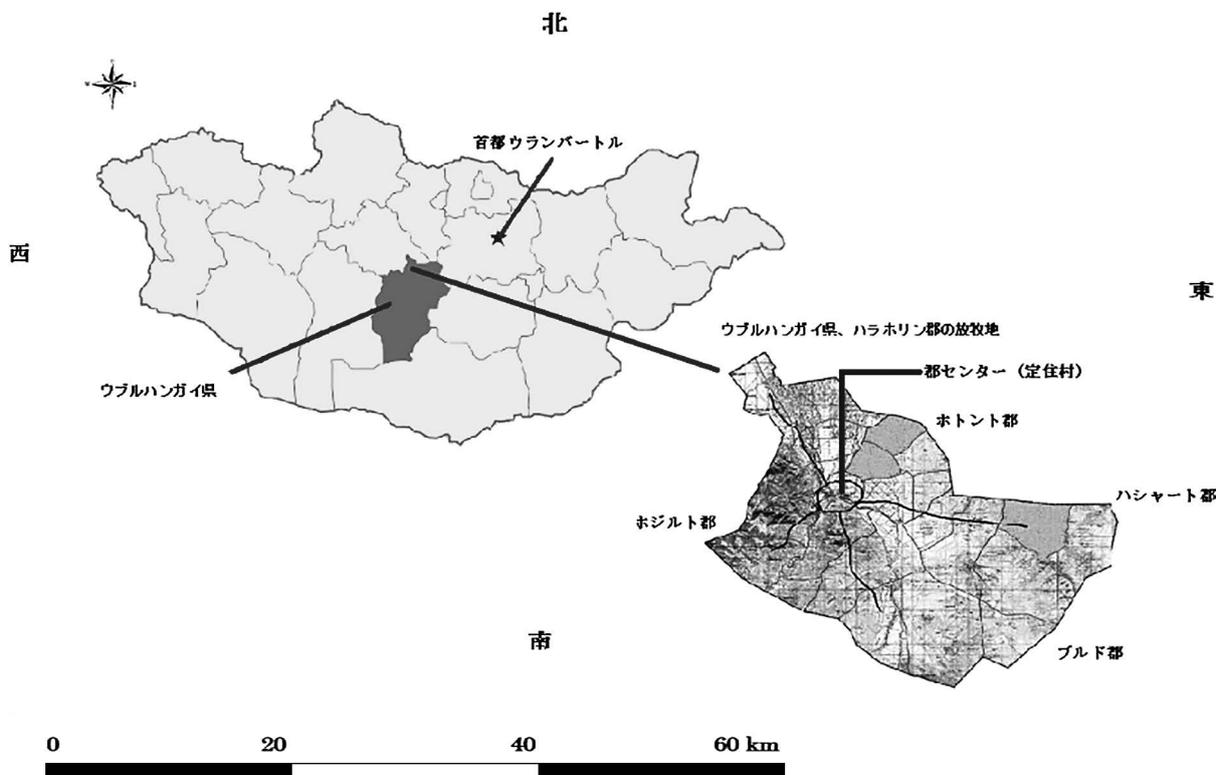


図1 モンゴル国ウブハンガイ県およびハラホリン郡（筆者作成）

は「黒い砂礫」という意味である。

現在のウブルハンガイ県のハラホリン郡はモンゴル国の中心部、首都ウランバートルから約365キロメートルに位置する。ウブルハンガイ県の県郡から約138km離れている。ハラホリン郡の周辺には、北部にアルハンガイ県のホトント郡、東にハシャート郡、東南にウブルハンガイ県のブルド郡、西にホジルト郡と接している。

ハラホリン郡の面積は2241km<sup>2</sup>であり、バグと呼ばれる下位の行政区画が8つで郡が構成されている。郡の人口は12601人で、人口の50.1%が男性、49.9%が女性である。世帯数としては、定住地区である郡センターに2529世帯、それ以外のフドーと呼ばれる草原地帯に遊牧民が1099世帯暮らしている (Enkhbat and Ganbat *et al.* 2013: 11–15)。

同郡は、モンゴルのハンガイ山脈の東端に位置し、郡センターの北にはオルホン川が流れている。郡センターには、病院、役所、銀行と小中高一貫の十二年制学校が三校ある。またハラホリン市場には多くの商店がある。

郡センターに居住する人々は、市役所、病院、学校などの公共施設で仕事をしながら暮らしている。また、郡センターに住む人々も家畜を所有することがある。彼らは親戚関係の遊牧民に家畜を「委託放牧」して管理させている。さらに郡センターに居住する人々は法律に則り個人所有の0.7ヘクタールまでの土地権を得て、固定家屋を建てて、家族用の食料（キャベツ、ジャガイモ、ニンジン）などを栽培している。また社会主義時代、国営農場だったため、現在でも穀物などを栽培する者もいる。ハラホリン郡は他のモンゴルの地域の郡と比べると比較的多くの人が定住した地域だといえる。この地域のいくつかの郡を管轄する地方裁判所もハラホリン郡に置かれている。

ハラホリン郡の前身は、社会主義時代に設立されたハラホリン郡国営農場(サンギーン・アジ・アホイ)である。1956年の4月13日に政府決定第

256号によって新たに設立された国営農場だった。牧畜社会のモンゴルにおいて戦略的に小麦を生産する国営農場として設置されたのである。したがって、広大な牧草地に加えて、社会主義時代からの小麦畑が今も広がっている地域でもある。また、この地は1957年12月、県の所属がアルハンガイ県からウブルハンガイ県に移行した (Enkhbat and Ganbat *et al.* 2013: 11–15) という点でも特徴的である。

ハラホリン郡の国営農場は海拔1454メートル、郡センターは北緯41° 11、東経102° 48に位置する。面積は23万3000ヘクタール、うち農地が3万ヘクタール、牧草地19万4000ヘクタール、森林・河川9000ヘクタールだった。当時 (1956) のデータで人口は約8000人、そのうち約1000人が郡の中心部に住んでいた。この農場の主力は農業で、播種面積2万8000ヘクタール、うち1万8000ヘクタールは穀物（大部分小麦）で年1万1000トン为国へおさめる。専門家は5年計画で働かせ、党部局、委員会、郡の会議で仕事の報告をおこない、定期的に評価した。農場の具体的な目標を人々に宣言、実践することで、仕事の関連を改善させていたのである (小長谷・S. チョローン 2013: 75–76)。

## 2. 社会主義期の生産組織

1911年、モンゴルは清朝からの独立を宣言した。しかし中国によって自治に格下げされたりしたが、1924年、ソビエト連邦の影響の下で、世界で二番目の社会主義国である「モンゴル人民共和国」となった。その後、モンゴル牧畜社会が急激な変化を迎えたのは1927年である。政府は、封建諸侯の財産および家畜を没収した。さらに寺院に対する重税賦課などの決定を行った。そして牧民の集団化を推進したのである。この政策に関して、歴史学者のモリス・ロッサビは1920–1930年代に集団化政策に着手したものの失敗に終わったと結論づけている (モリス・ロッサビ 2007: 64–65)。

極端な集団化政策の失敗の結果、モンゴルの各地でソ連の干渉に対する反対運動や、極左政策の廃止を求める声が相次いだ。またモンゴルにおける富の源泉たる家畜も激減した。そのため、1941年に国家主導の下で国家優秀牧民会議 (*Ulsyn sain malchdin zövälgöön*) が開催された。この会議では、モンゴル全体の家畜の頭数を増大させると宣言した。さらに、私有家畜を持つ世帯に対する課税を強化し、国に対して肉、毛、牛乳を強制的に供出することになった。このような課税に関する政策は非常に厳しかったため、モンゴル全体の家畜頭数は増大せず、逆に1941年に270.5万頭であった家畜頭数は1945年200万頭まで激減した。このような状態は1948年までつづいたのである (Lonjid 2017: 66-145)。

1948年、第三回の国家優秀牧民会議が改めて開催され、家畜頭数を増加する計画が議論された。その結果として当年から社会主義建設のため五カ年ごとの長期計画を実施することになった。すなわち1948～52年の第一次五カ年計画、1953年～57年の第二次五カ年計画、1958～60年の三カ年計画、1961～65年の第三次五カ年計画である。この五カ年計画は、1980年後半まで行われていた。この計画では、家畜の頭数を増やすことから始まり、農場の普及、集団化、工業の建設、社会文化的発展に重点が置かれていた。

そもそもモンゴル牧畜社会は昔から世帯を単位とした家畜経営が行われていた。しかし1950年代後半、社会主義的な計画経済のもとで牧畜協同組合 (ネグデル)・国营農場 (サンギーン・アジ・アホイ) が設立されると、個人や王侯貴族、チベット仏教の寺院などによって占有されていた多くの家畜や土地が公有化された (モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 (1969) 2: 130-146)。すなわち、遊牧民たちはネグデルの家畜を放牧する「労働者」へと変貌したということである。

牧畜協同組合という名はついているものの、事実上、政府主導による集団化政策のもとで牧

畜生産が行われるようになったのである。当時のモンゴル人民共和国の政策では、牧畜協同組合の所有する家畜は、「共有家畜」(*khamtraliin mal*) と「私有家畜」(*khuviiin mal*) に大別されていた。牧畜協同組合 (ネグデル) における家畜の主体はネグデルの共同所有であった。

家畜の私有はネグデルに所属する牧民だけに限られており、家畜頭数は地域によってそれぞれであった。ハンガイ (森林草原) 地帯の地方では、一世帯が50頭まで、そのうち三分の一は大型家畜 (牛、馬、ラクダ) である。私有家畜を一定数以上増やすことは法律によって制限されている (小貴 1985: 127-128)。

牧民は共同所有の家畜を、種類別・性別・年齢別に細分し、ソーリ (生産小隊) 単位に放牧し、共同所有畜群の放牧労働に支払われる賃金を基本給として、ヒツジ毛・皮革・乳製品などの出来高に対する報奨金、および私有家畜としての50頭からの収入源によって生活する仕組みになっていた。

ネグデル期 (1956) には、国全体の五カ年経済計画にもとづいて、年度ごとに各県、各郡、ネグデルの共有家畜を中心とした家畜生産の達成目標がノルマとして与えられた。それは乳・肉・毛などの生産のほか家畜増加率や損失抑制率にいたるまで詳細に決められており、ノルマの達成率をめぐって互いに競争関係が行われた (Sanjdorj 1978: 184-232)。このため各ネグデルは牧民各人に厳しいノルマを課した。当時のモンゴル人民共和国からネグデルや国营農場に設定された計画を達成するため、地方の人々は必死に働くことになったのである。

### 3. 清朝時代の義賊「シリーン・サイン・エル」

さて社会主義時代の「家畜泥棒」の実態を検証する前に、本節では、清朝末期に活躍した義賊「シリーン・サイン・エル」について概観しておきたい。

そもそも遊牧という生業は、中央ユーラシア

の各地で見られ、家畜のある限り「家畜泥棒」は常に発生する可能性を有している。そのため、「家畜泥棒」とは遊牧という生業を持つ地域において普遍的な現象であるといえよう。遊牧文明の持つ経済的側面に関して、マルクス、レーニン、エンゲルスらは「匈奴などの遊牧民族の経済の基本は略奪[略奪経済]であり、戦乱や略奪によって族長の権力を強化していた」と論じた (Rotsin 1984: 113-114)。このような戦争時代での略奪を想定し、ソ連の研究者たちは、「略奪経済」という言葉で形容してきた。

そうした歴史的に家畜泥棒＝略奪が行われてきたことから、小長谷は「略奪という経済行為はもはや歴史のなかにしか存在していないが、略奪経済を支えてきた文化的な思考パターンは確実に残っていると思われる」と述べている (小長谷 2002: 93-94)。

モンゴル高原の牧畜社会では、清朝によるモンゴル支配の時期 (17世紀末～20世紀初頭) に、シリーン・サイン・エル (*shiliin sain er*) という貴族や金持ちから家畜を盗んで貧しい人々に分け与える「義賊」が活躍していたという話も存在する。シリーン・サイン・エルとは、モンゴル語から直訳するならば「平原の良い男」という意味である。差し詰め「平原の益荒男」といったところであろうか。彼らの物語は、現在に至るまで口承で語り継がれてきた。

シリーン・サイン・エルに関して、その存在が確認できるのは、モンゴルが清朝の統治下にあった1690年代からである。当時のモンゴル社会では、基本的に封建君主とアルドと呼ばれる牧民という2つの身分に分けられていた。封建君主は、遊牧民に対して税負担を増やして行ったため、普通の牧民たちは、貧しかったという。モンゴルの歴史学者ゴンゴルによると、こうした貧困に対して、その貧困を撲滅するために、当時の遊牧民が編み出したものの一つが、「シリーン・サイン・エル」という義賊であった (Gongor 1969: 255-270)。ただし封建君主へ抵抗

するために義賊が生まれたというゴンゴルの説は、社会主義イデオロギーをそのまま当てはめたものなので、その実態は不明である。とはいえ、17世紀の終わりにシリーン・サイン・エルが存在したことは確かなようだ。

彼らの起源は、伝説では、北モンゴル (現在のモンゴル国にほぼ重なる地域) の現在のダリガンガ人の住む地域で始まったと言われている。ダリガンガ人は、現在のモンゴル国ウランバートルから南東、現在のスフバートル県の南部で清朝皇帝の所有する家畜を放牧する義務を負っていた人々である。言うなれば、清朝皇帝の牧場で働く牧夫である。そのため、モンゴルの他の旗 (清朝時代の行政単位) と同じような駅伝、監視所が置かれ、租税や兵役が課されていた (Oidov 2013: 1-15)。しかし重要なのは、ホブズボウムが論じたようにこうした義賊は、資本主義の前段階として社会階層や貧富の差が明確になりはじめたとき、起こる現象だということである。政治制度としてはハーンや貴族といった階層化がされていたものの、経済的には、比較的平等であった伝統的なモンゴル遊牧社会において、清朝皇帝の牧場で義賊が生まれたのは、偶然ではないだろう。大ハーンも貴族も庶民もフェルト製の移動式テントに住まい、ヒツジ肉と乳製品を食べていた点には変わりなかった。ところがこの地域には、漢族の商人や清朝の役人たちが頻繁に出入りし、ウマやヒツジを徴収し、清朝皇帝への捧げものとして持って行ったという点で特殊な地域だったのである。

そんな地域で生まれた「シリーン・サイン・エル」の中でもっと有名な人物がトロイ・バンディ・ナンザド (*Troi bandi Nanzad*) という人物である。この人に関する物語や歌は、モンゴル国全土に広く伝わっている。更には、1999年にはモンゴル東部のスフバートル県に、記念の石像も建てられている (写真1)。

このトロイ・バンディは「税 (*tatvar*)」と称して貧しい遊牧民から徴税した家畜群、中国商



写真1 「トロイ・バンディ」の記念の石像  
(2017年7月 筆者撮影)



写真2 ドルジという人物の住んでいた山の洞窟  
(2016年8月 筆者撮影)

人が遊牧民から奪った財産、彼らと結託した貴族たちが所有する家畜を奪い取り、その後貧しい人々に分け与えていたという。

以上に述べたように義賊という現象は文化が伝播したため生じたものではなく、牧畜社会を含む農民社会に類似した現象が起こっており、社会関係上、部族組織・血族組織の発達した段階から近代資本主義社会に至る中間にあるタイプの社会に発生しているのだという。

ホブズボウムは、モンゴルを含む中央アジアの事例を紹介して論じてはいないが、シリーン・サイン・エルに関していうならば、清朝支配によって牧民が自由に移動できなくなり、なおかつ社会階層化が進んだ結果、生まれた現象であろう。また、清朝皇帝の牧場であったダリガンガでシリーン・サイン・エルが生まれたとするならば、ホブズボウムの論じる「大規模な経済に取り込む」外来の征服者に対するレジスタンスだと考えることも可能である。

興味深いことに社会主義時代にもシリーン・サイン・エルのような泥棒を行っていた人物が存在していたといわれている。しかし、社会主義時代の「シリーン・サイン・エル」は、盗んだ家畜を貧しい人々に分与するのではなく、人々に奪った家畜を販売していたという。例えば、筆者が調査したウブスハンガイ県ハラホリン郡にはこうした人物がいたことを現地の人々が教

えてくれた。その人の名前をドルジ（仮名）といた。彼は、社会主義時代の1980年から1990年にかけて、シリーン・サイン・エルのような家畜泥棒を行っていたという。彼は、ウブスハンガイ県から遠く離れた、モンゴル東部のドルノド県、南東部のドンドゴビ県、中部のドルノゴビ県、南部のウムヌゴビ県で家畜を盗んで自分の居住地周辺に販売していたという。

そうした、広範囲を移動するため、彼は自身のゲルを持たず、山の洞窟に住んでいたとも言いが、その真偽のほどは明らかでない（写真2）。ここで重要なのは、地元のハラホリンの人々は、ドルジに対して、それほど悪い人物だと考えておらず、むしろ「義賊」のような人物だと考えていたことである。

ドルジは、遠方から盗んできた家畜を販売している。つまり、「遠方の知らない人からの盗み」は、「良い事」で、「近所の知人からの盗み」は「悪いこと」だというモンゴル遊牧民独特の発想法が潜んでいるように思われる。興味深いのは、社会主義時代の厳しい検閲のもとで出版されていた文学の本や雑誌に義賊「シリーン・サイン・エル」の物語はそのまま出版されていたことである。つまりモンゴル人民共和国の政府は、昔から財産の再分配をしていた「シリーン・サイン・エル」に関する物語をイデオロギーとして利用

したのだと考えられる。

#### 4. 社会主義時代の家畜泥棒「サイン・エル」

20世紀を迎え、モンゴルは社会主義の時代となったが、不思議と家畜泥棒は社会主義時代も無くなることはなかった。ここでは、社会主義時代に活躍した「サイン・エル（良い男）」という「家畜を盗み、販売する家畜泥棒」について、その役割を検討していきたい。以前の「シリーン・サイン・エル」という人々は社会主義時代に入ると、どうやら「サイン・エル」となったらしい。それにしても、貧富の差がほとんどなく、私有財産を否定した社会主義社会において、なぜ泥棒が必要なのだろうか。とりわけ社会主義時代、家畜の多くは「共有家畜」(*khamtraliin mal*)であった。一般的には、モンゴルの牧民は牧畜協同組合（ネグデル）と国営農場（サンギーン・アジ・アホイ）に家畜を委託していた。しかしフィールドワークを通じて、現在のモンゴル国ウブルハンガイ県ハラホリン郡において社会主義期のハラホリン郡国営農場の牧民たちの間では、家畜泥棒が頻繁に起こっていたことがわかってきた。いったい彼らは何のために家畜を盗んでいたのだろうか。

具体的には政府による集団化政策のもとで牧畜生産が行われていた。当時のモンゴル人民共和国の全国規模の牧畜政策により牧畜協同組合の所有する家畜は、「共有家畜」(*khamtraliin mal*)や「私有家畜」(*khuviiin mal*)に大別されていた。この形態は、1956年代から1992年代まで変わらず続いた。また、国営農場（サンギーン・アジ・アホイ）は、農業の組織ではあったが、「共有家畜」を所有していた。

また、当時のモンゴル人民共和国は、政府より計画（ノルマ）が設定され、競争をうながし、「労働英雄」を褒賞するという制度によって、社会の目標と個人の目標の合一がはかられていた（小長谷 2013: 4-5）。

それにしても、このような社会主義社会にお

いて、家畜泥棒が多くあったことを聞き、筆者は非常に驚いた。60歳以上の人々に聞き取りを行うと、社会主義時代も家畜泥棒があったと証言する。家畜は共有化されていたはずである。なぜ、家畜泥棒があったのだろうか。ここでは、聞き取り調査から得られたデータを紹介していこう。

#### 事例 1. BA 氏（男、65 歳）

ウブルハンガイ県のハラホリン郡センターから南へ15km離れた所に宿営する遊牧民BA氏は語る。

「私は1980年代には、ハラホリン国営農場の家畜（ヒツジ・ヤギ）を放牧していた。その時代は良かったけど、上から設定されたノルマは難しかった。その目標を達成するため、様々な方法をやっていた。中には、ヤギのカシミヤの代わりに犬の柔毛を入れて納品していた牧民たちもいた。なぜなら、その羊毛やカシミヤのノルマを達成するとネグデルから賞金が出たり、お祝いのメッセージなどの褒美がもらえたりするからだ」。(2016年8月12日に聞き取り)

#### 事例 2. O 氏（男、46 歳）

ウブルハンガイ県のハラホリン郡センターから北へ30km離れたアルハンガイ県のハシャート郡と接している牧草地で宿営するO氏は以下のように語る。

「社会主義時代といえば、私は子供だったんだよ。当時、父はアルハンガイ県にあった「光の道」(*Gerelt zam*)ネグデル」(牧畜協同組合)の馬を放牧していた。私の知る限り、1984年の春にうちの馬群からメスウマ2頭、オスウマ2頭が盗まれた。それを誰が盗み、別の人物と「交換」したかを私の父は、だいたい分かっていた。しかし父は泥棒だと疑っていた相手(XX氏)に対して、なにもせずに放っておいた。しかし、1990年代初めの民主化以後、XXさんがうちにやって来てお父さんとお酒を飲みながら以下の

ような話したことが、記憶に残っているよ。「友人である君（O氏の父）から家畜を取るしかなかったんだ。本当に申し訳なかった。俺は以前、5頭の大型家畜（ボド<sup>5</sup>）を失ったせいで刑務所に行ったこと君は知っているだろう」と言った。

さらに彼はこう続けた。「俺は刑務所から出所して、やっとのことで再びネグデルのウマを放牧する仕事についたんだ。ところが、ある日、刑務所で敵だった男が家に来て『（ノルマを達成するために）ウマを渡さないとお前を殺すぞ!』と脅したので、仕方なく君の馬群からウマを取って彼にわたしたんだ。君は知っているだろう、俺が取ったこと!」と語った」。

しかし父は、彼に対して「知っていたよ。君がウマを渡したその人物は、うちのウマをネグデルの畜産工場 (*mal beldekh uildver*) に納入したんだよ。君の敵（XX氏の刑務所での敵）の弟が畜産工場の会計係として勤めていたとき、上からのノルマを達成できなかったため、彼（畜産工場の職員）は、自分の兄に、つまり「XX氏の敵」に何とかしてくれと頼んだそうだ。君は私から家畜を取って、（敵の男）に渡し、あいつの弟はネグデルの畜産工場に納入した。その結果は同じだろう。ネグデルの物は、結果的にネグデルの物となったんだよ」とO氏の父は語ったという。（2016年8月16日に聞き取り）

つまり「盗み」という行為を媒介としながら、ウマの交換をすることで社会主義のノルマ達成という辻褃合わせをしたというわけである。つまり、ネグデルの会計係が兄を通じて第三者であるXX氏を脅迫してO氏の父から家畜を盗んだということである。普通に考えると、明らかに犯罪的な不正行為である。しかしXX氏も以前に「家畜を失って」刑務所に入っている。その背景には、どうやらインフォーマルな家畜の交換によってノルマをなんとか達成しようとするネグデル内部の姿が見えてくる。

### 事例3. A氏（男、60歳）

ウブルハンガイ県のハラホリン郡センターから北へ25km離れた所に宿営するA氏は以下のように語った。

「私はネグデルの食肉センターに馬群の追い立て<sup>6</sup>をしていた。当時、ネグデルから設定された食肉の（ノルマ）を達成するのは、非常に大変なことだった。追い立ての途中で家畜が盗まれたり、死んでしまったりすることが起こるからだ。そういった場合、知人関係を頼ってなんとかしていたんだよ。時には「泥棒」と秘密の交渉をすることで「正しくない手段で手にいれた家畜 (*buruu gariin mal*)」、つまり盗まれた家畜を納品することもあったよ。食肉センターに家畜を納入した後、貰った給料や賞金を合わせるとより多くのお金を得る。しかし、相手に買った家畜の支払いをするので無くなってしまうものだったよ」（2017年7月24日に聞き取り）

そもそも「シリーン・サイン・エル」という言葉の意味は、「遠隔地から家畜を奪って貧困な人々に分与する義賊」である。モンゴル人は、昔からそのような人物を尊敬してきた。その結果、「シリーン・サイン・エル」に関する様々な物語が生み出されて人口に膾炙してきたのである。ところが、以下の事例では、必ずしも貧しい人々に分与しない泥棒であっても、人々からは尊敬されるようだ。

### 事例4. 家畜を販売するシリーン・サイン・エル

ウブルハンガイ県ハラホリン郡に住んでいる（S氏65歳、女性）筆者の祖母である。彼女は社会主義時代、ハラホリン郡国营農場で勤めていた。祖母は当時、この地域で有名であった義賊「シリーン・サイン・エル」について以下のように語ってくれた。

「1940年～50年代に、Ts. バトムフとデンベル・オチルという二人の男は、ともに兵役を終え、ウランバートルから約365km離れたウブルハン

ガイ県ハラホリン郡に帰ることになった。しかし乗り物がないので、徒歩で帰ることになったんだ。その道中、二人は馬群を見つけた。そこでデンベル・オチルは『この栗毛の馬を盗んでしまおう』と言って、夜間にその馬が寝ているときに捕まえた。もう一頭馬を捕まえて、バトムフにあげて、二人は馬で故郷へ帰ることになったんだって」

興味深いのは、彼は後にその栗毛の馬で多くの泥棒を行ったと語ったことである。祖母の話は続く。

「数年後、デンベル・オチルは自身の泥棒の『武勇伝』を話した。彼は、地元から約200km離れたゴビ砂漠から30頭の牛を盗んで見つからなかったのだというのさ。たくさん牛を追っていると、追っている最中に牛は排泄物を出すから、跡が残ることになる。すると警察や取られた側に見つかる可能性は高い。しかしデンベル・オチルは、牛の排泄物を全て穴に埋めていったのさ。だから彼は一頭も残さずに、誰にも見られることもなく、30頭の牛を連れて来ることができたんだ。ただし、彼は盗んできた牛の群れを地元の貧困な人々に分与するのではなく、人々に販売するようになったんだよ」

(2017年8月3日に聞き取り)

それでも、このデンベル・オチルは、ハラホリン郡では、現在でもシリーン・サイン・エル」すなわち草原の義賊として理解されている。こうした社会主義時代の家畜を販売する泥棒がなぜ評価されてきたのか。それはもう明らかであろう。お金を払ってでも、外部から家畜を持ってきてノルマを達成する必要があったからだ。もうひとつ重要なのは、女性である祖母がこういう話を知っているとおり、家畜泥棒に関する情報は、女性に隠された情報なわけではないということだ。

20世紀のモンゴル人民共和国の社会階層は人民革命党幹部のエリート層と一般の人民という二つに分かれていた。政府は貴族や寺院の家畜を共有化し、牧民たちに再分配した。しかしその代わりに厳しいノルマを設定するようになった。そうした中、ネグデルや国営農場で働く労働者としての牧民たちは、生産目標を達成するため必死に働くことになった。そんなノルマを達成できそうにないとき、牧民たちの帳尻合わせのために依頼されて「サイン・エル」たちは、家畜を盗むようになったのである。つまり(図2)で示したようにモンゴル政府は、ネグデルや国営農場の牧民に対して厳しいノルマを設定する。その一方、A氏はノルマを達成できない場合は、

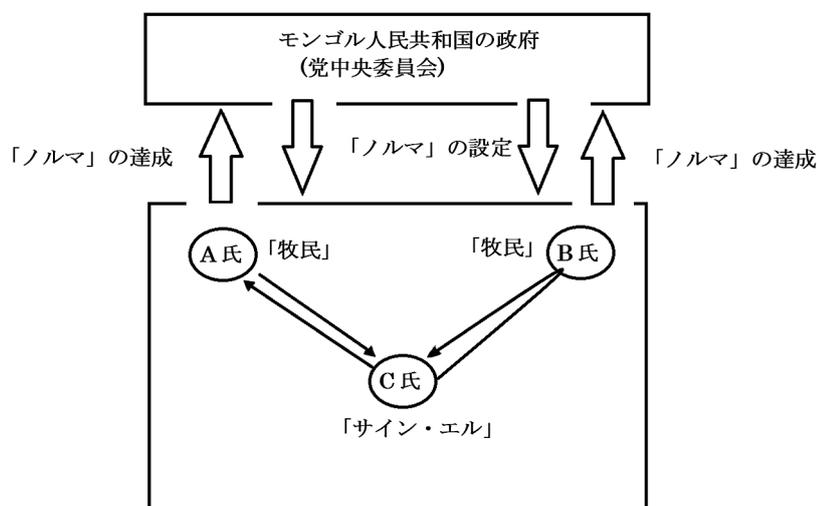


図2 モンゴル人民共和国における「互奪性」(筆者作成)

義賊「サイン・エル」に家畜の奪取を依頼する。依頼を受けた義賊「サイン・エル」のC氏は、B氏の余剰家畜から家畜を奪い、A氏に売るのである。その家畜を買ったA氏は政府に課されたノルマを達成できるようになるのである。逆にB氏が、ノルマが達成できそうにない場合、以上で述べた方法と同じ方法でC氏に依頼してA氏を含む他者から家畜を盗んでもらう。つまり、牧民同士はお互いの家畜を“盗みあって”ノルマを達成する「互奪性」によって生存を維持していたのである。

### おわりに

本論では、従来の義賊研究では報告のない、比較的安定した社会主義時代において家畜泥棒が頻繁に起こっていた事実をモンゴル国ウブスハンガイ県のハラホリン郡の事例を通じて報告した。かつて清朝時代には、貴族たちから家畜を奪い貧しい人々に分配していたことを遊牧民たちは「シリーン・サイン・エル」として尊敬していた。しかし、社会主義時代では、彼らの役割は変容している。すなわち、泥棒たちは王侯貴族から家畜を盗むのではなく、ノルマを達成できそうにない牧民たちの帳尻合わせのために依頼されて家畜を盗むようになったのである。

社会主義の遊牧民に対する基本的な政策理念は、旧貴族や富裕者の家畜を没収しネグデルの家畜として財産（家畜）の再分配を図り、財産を社会全体の共有物にすることにあった。この政策自体は、「シリーン・サイン・エル」たちの行為に通じるものがあつたといつてよい。しかし1950年代後半からネグデルや国营農場が設置され、遊牧民たちは、ネグデルの家畜を放牧する牧畜労働者へと変貌する。ネグデルや国营農場ではノルマが設定され、それを達成するため、地方の人々は、必死に働くことになった。その一方で家畜は「生きた財産」であるので、季節によってはガン（干害）やゾド（寒害）が起り、家畜が大量死するといったことも起こる。する

とノルマを達成することが出来なくなるわけである。そんなときネグデルの家畜を放牧する牧民たちは、何とかしてノルマを達成させるために「家畜泥棒」に他の地域から盗むことを依頼するわけである。こうした社会主義時代の家畜泥棒は、「サイン・エル（良い男）」と呼ばれた。

以前の「シリーン・サイン・エル」は、金持ちから盗んで貧しい人に分配する義賊であった。彼らは富の再分配の役割を担っていたといつてもよい。ところが社会主義時代の「サイン・エル」は、家畜を盗んで販売し、ノルマの達成に寄与するという人々である。つまり社会主義時代の「サイン・エル」による家畜の奪取は、余剰部分は共有化する一方、家畜を減らしたという理由で罰金を科すという政治の側の不当な行為に対して、牧民同士で行った解決手段だったと言える。

仮に販売しているにせよ、彼らが「良い男」と呼ばれていた理由は、それだけ一般の牧民たちの厳しいノルマ達成をサポートしていたからに違いない。そういう意味において、社会主義時代のサイン・エルも一種の義賊だといつてもいいのかもしれない。ただしシリーン・サイン・エルからシリーンという言葉が無くなったことは、興味深い。このシルとは、大平原を意味するとおり、彼らは旅をしながら暮らしていた。一方、社会主義時代の泥棒たちは、普段は別に仕事をもっており、半定住化した暮らしをしていた。シリーン、すなわち「大平原の」という肩書が無くなったのは、彼らが定住化しつつあつた状況を如実に物語っているといえよう。

キャロライン・ハンフリーとデヴィッド・スニースが指摘するように、政府によって課されたノルマを達成するということは伝統的な放牧の慣習には存在しなかつた。ところが社会主義時代になると、人民を定住化させる政策をとつた。人民は定住地である郡センターに住むか、牧民になるかの選択を政府の計画によって決められていた。また牧民の移動経路もあらかじめ

地方政府によって設定されていたのである。このような義務的納入としてのノルマは、以前の遊牧社会の生活様式の中には存在しないものだったので、尋常ならぬ影響をもたらした。特にウマ飼いを担当する人々は、いつも放牧地に家畜を飼いながら生活するより、簡単な仕事をしたいという興味を持つようになったと論じている (Humphrey and Sneath 2006 (1999): 224–229)。

最初に紹介したように、ソ連時代のシベリアのブリヤートの農村社会の中での再生産に回収されない余剰である「操作可能な資源 (manipulable resources)」こそが、社会主義体制下において、インフォーマルな社会関係を生み出す源泉となったのだとハンフリーは論じている (高倉 2008: 568; Humphrey 1983)。

本研究で得られた情報からは、モンゴル人民共和国のハラホリン郡の事例では、「盗まれた家畜 (馬) が操作可能な資源としてインフォーマルな社会関係の源泉のひとつとなっていた」ということがわかる。こうした家畜を盗む人が、人々からサイン・エル、すなわち「良い男」として肯定的に評価されてきた。このことは、非公式な形ではあるが、モンゴルの地方の牧民たちは、困ったときにお互いの家畜を“盗みあって”ノルマを達成するという互奪性によって、自らの生存と地域社会を維持してきたことを示しているといえるだろう。

## 注

- 1) 牧民 (*Malchin*) ネグデル期「1956～1992年」の間、牧畜協同組合の家畜を放牧する「労働者」である。
- 2) 遊牧民 (*Nuudelchin*) 牧民という意味も含まれるが基本的には私有の家畜を放牧する人々である。
- 3) 夏の時期に、日照りによって家畜が餓死してしまうこと。
- 4) 冬季に、積雪によって家畜が草を食べることが出来ずに餓死をしてしまうこと。

- 5) モンゴルでは大型家畜の馬、牛、ラクダをボド (*bod*) という。
- 6) 当時、ウブスハンガイ県、ハラホリン郡から数多くのウマを追いながら旅をして、ウランバートル市にある食肉センターに運搬、納入していた。これをモンゴル語では、トーバル (*tuubar*) という。

## 参考文献

### 日本語文献

- 小貴雅男  
1985 『遊牧社会の現代』 青木書店。
- 小長谷有紀  
2002 『遊牧がモンゴル経済を変える日』 出版文化社。  
2013 「序」小長谷有紀、S. チョローン (編) 『国立民族学博物館調査報告110モンゴル国営農場資料集』 国立民族学博物館、pp. 4–5。
- 原洋之介  
1999 「デサー どうして人は他者に想いをはせるのか」『エリア・エコノミックス—アジア経済のトポロジー』 NTT出版、pp. 130–166。
- 高倉浩樹  
2008 「Caroline Humphrey “*Marx Went Away—But Karl Stayed Behind*”」『文化人類学文献事典』 弘文堂、p. 568。
- ホブズボウム、エリック (船山榮一訳)  
2011 (1969) 『匪賊の社会史』 筑摩書房。
- Bat-Ochir, BALJINNYAM  
2018 「市場経済化する「家畜泥棒」: モンゴル国ウブスハンガイ県ハラホリン郡の事例から」『滋賀県立大学人間文化学部研究報告 人間文化』 44: 2–14。
- マーシャル・サーリンズ (山内昶訳)  
1984 (1972) 『石器時代の経済』 法政大学出版局。
- モリス・ロッサビ (小林志歩訳)  
2007 『現代モンゴル—迷走するグローバリゼーション』 明石書店。
- 山崎正史  
1997 「ままたらなさと豊かさ」小長谷有紀 (編) 『アジア読本モンゴル』 河出書房、pp. 61–68。
- 吉田 実  
1980 『モンゴル』 古今書院。

モンゴル科学アカデミー歴史研究所（田中克彦監修 二木博史、今泉博 岡田和行訳）  
1988 [1969] 『モンゴル史2』東恒文社。

英語文献

Humphrey, Caroline

1998 *Marx Went Away-But Karl Stayed Behind: Updated Edition of Karl Marx Collective: Economy, Society and Religion in a Siberia.* Michigan: The University of Michigan Press.

モンゴル語文献

Enkhbat, L and Ganbat, L.

2013 *KharKhorin sum högjüülekh tövlögöö 2014 ~ 2024 on.* Ulaanbaatar: Edosoluyns.

Gongor, D.

1969 *Khalkh tovchoon.* Ulaanbaatar: Ulsiin hevel.

Humphrey, Caroline and Sneath, David (Ts.Ochirbat  
モンゴル語翻訳)

2006 (1999) *Nuudeliin Mal Ajikhui Etseslekh*

*uu?*. (The End of Nomadism)  
Ulaanbaatar: Admon.

Oidov, B.

2013 *Ar khalhiin shilin sain erchiüüd -2.* Ulaanbaatar: Startlain.

Rotsin, S. K.

1984 *Ankhnii aimgiin kholbood ba Mongol nutagt tör uls üüssen n.*, Sh.Bira and Sh.Nastagdorj (eds.) *BNMAU-iin Mongoliin tüükh.* Ulaanbaatar: Ulsiin Kheveleliin gazar.

Lonjid, Ts.

2017 *Nügem juram togtooh üeiin mongolyn ediin zasag Mongolchuud niigem juramd davshin orson n.* (1924–1959). Ulaanbaatar: MONSUDAR.

Sanjdorj, M.

1987 *Socialist öөрчилөлт khiisen n.* (1940–1960) *BNMAU-iin tüükh 10.* Ulaanbaatar: Ardiin bolovsroliin yammii khevel.

2021年9月28日 受付

2021年12月2日 採択決定